

---

# エルドラド

榊燕

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

エルドラド

### 【Nコード】

N4141F

### 【作者名】

榊燕

### 【あらすじ】

一人の青年のネット世界でのコメディアンタジーを目指して書き進めています！今迄余りオンラインゲームをやった事無い（普通のRPGとかはやった事ある）青年サヤ。彼のどたばた冒険が始まります。十二月三日現在、修正したエルドラドを改めて登校させていただきました。

アクセス〇〇キャッチコピー〇〇（前書き）

謳い文句。

キャッチコピー。

キャッチフレーズ。

そうだったものです。

そしてこれが新しいエルドラドの物語の始まりです。

## アクセス〇〇キャッチコピー〇

エルドラド〇伝説の黄金郷〇

貴方には護りたい者がおりますか？

貴方には護りたい物がありますか？

世界はどうしようもなく残酷で美しい。

この世界で貴方は何を成しますか？

この世界で貴方は何を求めますか？

一度しかない、儚く短いその一生。

其処には意義がありますか？

其処には意味がありますか？

だからこそ求め、確かめ進むことを止めず、前を向いて歩いて行ける。

そんな残酷な事に耐えられますか？

そんな美しい事に耐えられますか？

……解らない。

……そんな事は誰にも解らない。

……神であろうとそれは変わらず、だから今生きている。

意味がある、意義がある、そんな事は解らない。

それでも今この場所に立っている。

貴方にとってのこの世界はどうですか？

一人一人違う。

戦う事。

護る事。

創る事。

遊ぶ事。

育てる事。

旅立つ事。

世界に何を求め成すかは貴方が決める事です。

この世界は貴方の世界。

何をするのも自由で、何をするのも不自由な世界。

さあ今こそ貴方の旅立ちの時。

誰も其れを止められません。

誰も其れを止めません。

決めるのは貴方自身。

今……世界の扉は開かれます。

今……貴方の世界の物語りが始まります。

その一步を……今……踏み出しました。

……望むべくは貴方に少しの幸と希望がありますように……

さあ……物語りが……始まります！

## アクセスの〜キャッチコピー〜（後書き）

全話完璧にリニューアルです。

今迄読んで下さり色々とおアドバイスを下さったり、御指摘していただいた皆さん申し訳ありません。

色々お諸事情によりあのまま続ける事が出来なくなってしまうしましたが、それでも書くのをやめたくありませんでしたので、新たにこうして書かせて頂きます。

もしよろしければ、これからは是非この物語を読んでいってやってください。

どうぞよろしくお願いします。

## アクセス〇〇〇〇利用規約

### 【利用規約】

#### 御挨拶

- ・弊社大人数参加体感型オンラインゲーム、エルドラドに御参加下さり有り難うございます。
- ・御参加頂く皆様には以下の規約を厳守し、楽しくこの世界での御時間を御過ごし頂けるようお願い申し上げます。
- ・弊社ゲームの中の人物大半は御参加いただいている皆さまです。目の前の相手が実在する存在であり、人間だということをきちん認識していただき、他のプレイヤーに迷惑のかかるような行為をせずに本製品を遊んでいただきたいと思います。

#### 規約

- ・ 一般的マナーを弁える事。
- ・ ネットマナーを弁える事。
- ・ ゲーム内でのストーカー（ストーキング）行為、セクハラ（セクシャルハラスメント）行為を固く禁ずる。
  - \* 尚こういった行為を発見した最アカウントの永久停止を致します。
- ・ 名誉毀損行為、侮辱行為や他者の業務妨害となる行為を固く禁ずる。

ずる。

・他者になりすましてサービスを利用したり、情報を改ざんする行為を固く禁ずる。

.....

略

・生命の危機があり、其れに大して責任は負いませんので御了承下さい。

\*尚全ての権利一切は弊社LPラピスラズリが保持するものです。  
無断での使用、配布を固く禁じ発見した最、裁判問題にさせて頂く場合もありますので御了承下さい。

以上の規約を厳守出来るのであれば、以下より御進み下さい。

【前へ】

【次へ】

【キャンセル】

【システムメニュー】

インストールを開始します.....

10%.....

30%.....

70%.....

99%.....

100%

インストールを完了致しました。

起動しパッチをダウンロードして下さい。

パッチダウンロード中……………

パッチダウンロード完了。

ゲームを起動します。

起動中……………起動中……………

起動しました。

エルドラド起動、どうぞお楽しみ下さい。

## アクセス〇〇〇利用規約（後書き）

可笑しな点や間違い等ありましたら御指摘、御報告があると大変助かります。

自分自身でも何度も見直し確認しましたが、何かありましたらよろしく願います。

## アクセス1〜キャラクターメイキング〜

「新たに生れし汝よ、これより訪ねし問いに心のままに答えよ。」

キャラクターセットが終わりログインした瞬間、目の前に綺麗な女性が現れて突然そんな事を言い出した。

ああ、ちなみにキャラクターセットとはいつでも実際、このゲームは本人がそのまんま投影されるから名前ぐらいしか弄れないんだけどな。

つとと、目の前の女性だよな問題は。

「……にしても……綺麗だよなあ……流石ゲーム、現実にやこんな女いねえよ。」

「あら、嬉しい事を言って下さいますね。ありがとうございます。」

思わず呟いた独り言に返事が返ってきたのには心底ビビった。

そりゃもう、思わず飛び跳ねちまうくらいにな。

目の前の女性、翡翠色の腰までのウェーブのかかった髪にワンポイントの蒼色の月の髪飾り。

顔立ちは日本人のようだが小顔で目元何かは少し垂れて、いかにものほほんとしたイメージ。

そして身長は恐らく155cmくらいだろうな……恐らくっていうのは……だって空飛んでんだもんでいうか、浮かんでんだもんで着てる服も白いんだけど何か輝いてる足下までの衣に薄い水色のヴェール。

いかにも女神様って感じだな！

「……ってNPCじゃねえの!？」

「違いますよ、私はレイアスと申します。以後もしかしたらこれからも出会える事があるかもしれませんでよろしくお願い致しますね。」

「うわっちゃ……いつ入ってくるかわからねえ俺達ユーザーの為に常時待機してねえといけねえだろうそれじゃあ……考えただけで疲れる。」

絶対俺には真似できねえし、真似したいとも思わん。

「そうだったのか……にしても……大変だねえ。こんないつ誰が来るか解らないこんな場所で待機し続けるなんてさ。」

「意外とそうでもないんですよ、こうやって私と御話出来ると知ってる人も少ないですしね。」

そりゃそうだろう。

わざわざ如何にも最初の説明NPCみたいな感じだからな、普通話しかけたりしねえでそのまま次へ次へって進んじまう。

俺だっと思わず呟いちゃっただけで、実際話しかける気なんて無かったんだからな。

「ふん、そうなんだ。あーそーいや俺の自己紹介がまだだったな、俺はし……サヤだ。これからまた会えるのか会えないのか解らないけどよろしく頼むわ。」

俺がそうやって片手をあげて挨拶するとクスクスと笑いながら応えてくれる。

「さて、本題に戻りましょうか、これから幾つか質問しますのでそ

れに答えてくださいね。この質問の答えによってサヤさんの身体能力、魔力、体力、職業が決まります。だからと言って余り考えず、心でそう感じたままに答えてくださいね。」

「了解。にしても一々こんな説明までしなきゃいけないなんて、実際やる側とやらせる側だと大変さの度合いも違うんだねえ。」

「ふふふ、実際こうやって説明なんてほとんどしませんよ。普通であれば最初のあの台詞から次へ次へといった感じで進むんです。今回偶々こうやって御話させて頂きましたので説明させていただいただけなんですよ。ちょっとした特別扱いです。」

悪戯つ子みたいな笑みを浮かべながら話しかけてくるレイアスは、綺麗だと感じる中にも、どこか可愛いと思える部分もあり、すげえ魅力的に見えた。

「コホン、では次から台詞通りに行きますのでお答えください。」

黙って頷いた俺を満足そうに見つめると、さっきまでの生きた笑みが消え、作られた微笑みが浮かぶ。

「まず、汝の名を答えよ。」

「サヤ」

「サヤよ、汝は今旅立った瞬間、背後から突然斬りかかれ瀕死の状態になりました。後ろを振り返ると其処には剣を振り下ろした汝と同じ人間が立っています。そして汝の手にも同じ剣があり、一突きすれば相手を葬りさる事が出来ます。汝はこの時どう動きますか？」

また最初から変な質問ってかなんて応えていいのか解らねえ質問だな。

ってかこんな感じの質問で、選択肢を設けて無いのであれば、答えは千差万別だろう。

……つまり、答えにカンニングってのは無い訳だな。

「……まあ殺しはしねえけど、死にたくないからな、相手から何とか剣を奪って戦闘不能の状態まで持っていけるようにするかな。」

「さやよ、汝は今目の前にボロボロになりながら泣き崩れる女性があります。そして女性の背後には汝が決して倒すことの出来ない様な高レベルのモンスターが数匹います。その女性を見捨てれば逃げることは出来ませんが、女性を抱えて逃げる事は不可能です。汝はどう動きますか？」

普通にそうやって聞かれれば逃げるか助けるかの二択だよな。

逃げて一人助かるか、助けようとして二人で死ぬか。

……ん？こういうのはありなのかね？

「んじゃその女性に逆に助けを求めながら二人で戦ってみる。最後の最後まで何とか抵抗してみるかね。」

質問には逃げることしか言われてなかったけど、普通戦つなら一人って考えるよな？

でも俺捻くれてるのかね、咄嗟にそんな考えが浮かんできたんだから。

まあどっちにしても死ぬ確率が高いものの、生き残る可能性もゼロじゃないはずだからな。

少しでも生存確率の高い選択をしたいな……実際その場に立つと

どうなるか解らんけど。

「サヤよ、汝は今仲間と共にクエストを受けました。そのクエストの最中いるはずのない高レベルモンスターが現れ仲間を一人、また一人と殺していきました。そして最後の一人が汝です。そして目の前には仲間を殺した高レベルのモンスターが瀕死の状態で倒れています。その隣でそのモンスターの子供が数匹不思議そうにその倒れたモンスターを起こそうとしています。汝はどう動きますか？」

……何なんだろうなこの質問、性質が悪いというか意地が悪いと言うか。

つまり復讐を遂行するか、その子供達を見て復讐を諦めるかって事かね？

……どうするよ俺。

仲間が殺されたら絶対許せねえ……だけど実際そんな光景見ちまったら絶対倒せねえよな。

「……取りあえずそのモンスターの傷をかるうじて動けるであろうレベルまで治す。もしくは看病する。殺しはしない、ただ決して許もしない。そして二度と被害が及ばないように人のいない処まで連れて行き、そこで離す。」

……理想はそうだけど、実際途中で暴れたりとかして結局倒しちまうんだろうなあ……まあ出来ればそういたいって事でいいだろう。

「最後の質問に移ります。」

レイアスがそう言って一歩俺に近付いてきた。

「サヤよ、今汝が手に一振りの剣がありますね？その剣を持って私

を斬りなさい。私を殺した際レアアイテムの武器と防具が初期から手に入ります。私に傷を負わせれば、傷の度合いに応じてアイテムが配布されず。貴方が思うままにその剣を御振りなさい。」

そう言っつて目を瞑ると斬りやすいだろうと両手を広げ斬りかかって来るのを待ち続けてやがる。

「……冗談じゃねえ。散々な質問ばかりで最後の最後に殺せだど？ふざけるにも程がある！いくらゲームでも人なんて殺したくねえよ！」

俺は思いつきり持っていた剣を投げ捨ててやった。

ザマアミロ。

ガチャンという剣が地面に落ちる音と共にレイアスが目を開いた。

「これで全ての質問が終わりました。これからサヤ、汝は旅立ちの時を迎えます。この世界は貴方の世界。汝に少しの幸と希望があらん事を。」

何事も無かったかのように終わっちゃった。

少し納得がいかずむすうっとしてたんだらう、可笑しそうにレイアスが笑いながら話しかけてくる。

「あはは、流石にこの質問は変ですよね……私も実際何度やっても可笑しいとしか思いません。でもサヤさん程、意図した答えと全く違う選択をした人はほとんどいませんよ。私が質問した人の中ではサヤさん一人だけです。最後の質問もそうですね、大概の人は何の疑問も抱かずそのまんま斬りかかって来るのですが、今まで数人サヤさんと同じように斬らない人もいましたね。その人達はそのあと剣を投げ捨てたりはしませんでしたけど。」

どこか嬉しそうに笑うレイアスを見てると、怒ってる筈なんだが段々と力が抜けてくる。

拳句の果てには何故か苦笑まで漏らしちゃった。

「……ゲームだもんな、実際はそういうのが普通なんだろう？多分俺は今までゲームってもんをほとんどやった事がないからかもしれねえな。」

とは言っても事前にネットで簡単に調べはしたんだけどね。

「なるほど、そういうものなのかも知れませんか。それでは名残惜しいですが御別れです。これからサヤさんは初心者の方と呼ばれるところに降り立ちます。其処からまっすぐ北にと言っても解りずらいと思いますので、看板から真っ直ぐ前に進めば村に着きます。其処でいろいろと説明を受けて見て下さい。」

「了解、何かすまんかったな、迷惑掛けて。でもいろいろ助かった、話せて良かったよ。もしかまた会う機会があればその時は宜しくな！」

そう言った瞬間、少しずつ眠りから覚めるような感覚で意識がその場所から離れていく。

意識を手放したと思った瞬間、すぐに意識が戻って来て俺は平原に立っていた。

そして自分の身体を確認していく。

特に異常がない事を確認した後、自分自身の身体の手触りをそれぞれ確認していったんだが……。

「はあ……これがゲームの中か、現実と何も変わらねえじゃねえか。」

本当に現実そのまんまで凄かった。

## アクセス〜キャラクターメイキング〜（後書き）

可笑しな点や間違い等ありましたら御指摘、御報告があると大変助かります。

自分自身でも何度も見直し確認しましたが、何かありましたらよろしく願います。

## アクセス2 旅立ち

「はあ……これがゲームの中か、現実と何も変わらねえじゃねえか。」

俺は今ゲームの世界、ゲームの中にいる。

大人数参加体感型オンラインゲーム【エルドラド】。

一年前に発売され、色々な問題を抱え込みながらも莫大な人気を誇っているのは、一重にこの現実世界と全く変わらない感覚を持ちえながら、冒険を楽しめるからだろう。

「この世界は貴方の世界……か。」

俺はこのゲームのキャッチコピーの一言を呟きながら改めて自身自身の感覚を確認してみる事にした。

手の握りしめる感覚、脚を踏みしめる感覚。

悪かった視力が良くなり遠くまで見通せる眼、風の音を聞ける耳。本当に全て本物と同じとしか思えねえ。

「うあ！ペッペッ！味覚までしつかりあるのか。」

試しに近くに生えていた草を口に含んでみたら、その余りの苦さに思わず涙が出そうになった。

全感覚が現実と同じかそれ以上なのを確認して初めて周りを見渡した。

「初心者の平原……か。」

周りは見渡す限りの平原。

そして目の前に木の立て板。

其処に【初心者の方の平原 ゼロの村】と書かれていた。

「やっぱり……少し出遅れたのかね、誰もこねえ。」

一年前に発売され、今日から本サービスが開始されたんだが……。

「流石に六時間もたてば殆んど皆もう進んでるよな。」

にしても……一人もいないのは不思議だな。

幾ら時間がたっているからって初日なんだ。

常時この場所に何人かはいるもんじゃないのか？

「……なんて、ゲームほつとんどやった事ねえからなあ……これが普通なのか？」

等と俺は暫く周りを確認しながら誰かが来ないか待ってみた。

待ってみたが……。

「誰もこねえ……。」

仕方なく俺は一人、レイアスに言われた通り看板から真っ直ぐ進み、村まで向かう事にした。

出来る事なら安全の為、数人で動きたかったんだがなあ。

何故かって？

そりゃ……。

「死んだら全部そこで終わっちゃうからな。」

そう、このゲームエルドラドは、死んでしまうと現実と同じで終

わりなのだ。

つまり、今使っている俺自身を新たに作り直さないといけず、全て初めからやり直し。

そして……。

「下手したらそのショックで死ぬ可能性があるって訳か…… ったく面白いぜ！」

命の危機すらあるゲーム……だからこそ皆真剣に、他のゲームと違って無茶や無理を避け、生きようとす。

勿論LPも死んだりしないよう、システムを作っているが、其れでも思い込みの激しい人とかは危ないらしい。

今までも既に数人そのような人が出てるらしいが、其れでも人氣が落ちる事は無かった。

規約の最後に書いてあったな……【生命の危機があり、其れに大して責任は負いませんので御了承下さい。】ってな。

「まあ、死なないように頑張るか！」

## アクセス2(旅立ち)(後書き)

可笑しな点や間違い等ありましたら御指摘、御報告があると大変助かります。

自分自身でも何度も見直し確認しましたが、何かありましたらよろしく願います。

## アクセス〓〓ゼロの村〓

看板から真つ直ぐ歩き続ける事十分。  
漸く村が見えてきた。

(遠くから見てるせいかやったら小せえ村に見えるなあ。)

そう思つのも仕方ねえだろう。

何せ今この距離から見ると、家らしき物が六件位しか無いように見えるんだからよ。  
取りあえずっと。

「この距離で見えてるってえ事は、あと十分くらいで着くかね。」

俺はそう言いながらも歩く速度が上がっていた。

無意識に……気づいたら小走りになっていたんだよ。

小走りしてから初めて俺が急いでる事に気付いた位、本当に無意識だったんだ。

十分位かかると思っていた距離が五分もかからず着いちまった。

「つつはあはあ……はあ〓。是がゼロの村か……本気小せえ。」

遠目から六件位しか無いように見えたが、本当に六件しか無かった。  
軽く乱れた息を整えながら其の村の中へ足を踏み入れた。

「おや？新しい御客人だね！ようこそゼロの村へ！この世界に訪れて間もないなら左手にある初心者館に行くといいよ。其処で色々この世界の事を教えてくれるはずさ。」

村に入った瞬間、如何にも村人Aといった感じの人が突然話しかけてきた。

いや驚くだろう？普通さ。

「っ！あ、ああサンキュー。あんた先に入った人か？」

少し驚きながら礼を言っつて其の如何にも村人Aつて感じの人を見る。

「？入った？どういうことだい？僕はこの村で生まれ、この村で育つたから他から来たつて訳では無いよ。……！そうか君が言っつているのは君と同じように異世界から来た人かどうかつて事だね！それなら答えは全然違つよ。僕はこの村の住人でノラつて言つんだ。すぐ其処の道具屋の裏手で小さな畑を耕してる者だよ。」

そう言つて笑つ村人A改めノラ。

（つまり何だ？この人はNPCつて事でいいのか？んでもつて異世界？解らん事が多すぎるな……。取りあえずノラが言つていた初心者館だかつつとこ行つてみるか。）

「そうか、変な事言つてすまなかつたな。左手つつとあそこだな？行つてみるわ、サンキューな。」

俺はそう言つてノラに軽く頭を下げながら、初心者の館だかつつて処に向かう。

「……館つて感じじゃねえだろうつこれは。」

どっからどう見ても小さな小屋にしか見えないそれが、初心者の館で間違い無かった。

何故解るか……それは大きく小屋の入口上に看板が掲げてあったからさ！

【初心者館！】

どうにもこうにもふざけている感じが満々だな。

まあ、んな事言っても仕方ねえし、一先ず入ってみる事にするか。

「カランカラン」

鈴の鳴る音と共に扉が開いた。

もちろん扉を開けたのは俺……では無く、恐らく俺と同じプレイヤーの人であろう俺より幾つか上っばい兄ちゃんだった。

ちなみに俺の年齢は二十一だ！

兄ちゃんは何となく見た感じ二十四か五位に見えるな。

「おっと、危ない危ない。ん？君もプレイヤーの子かい？」

開けようとしていた俺と、突然出てきそうになった兄ちゃん、必然的に衝突しそうになった処をギリギリで踏みとどまったのだ。

そして俺が質問する前に逆にされてしまった訳だな。

「あ、ああ……つとと、そうです。お、自分は今始めたばかりで、漸く村に着いた処だ……です。」

(うわっちゃん敬語なんて普段全く使わないからボロボロだなあ。兄ちゃんも笑ってるし！)

「ああ、ごめんね笑っちゃって。無理に敬語を使わなくてもいいよ。僕はダイス、君と同じく初心者で僕は少し前にこの村に着いた処なんだ。」

ん〜いい感じの兄ちゃんだな。

って、相手が自己紹介してくれたのに俺は何やってんだよ馬鹿。

「あ、すまねえ。俺はサヤだ。初心者ってこのゲームがつて事か？それとも俺みたいにこういったゲーム全般に関してという事か？」

軽く自己紹介をして、気になった初心者発言について聞いてみた。

「君つととサヤ君か。サヤ君はこういったオンラインゲームを余りやった事が無いんだね？僕は一応今まで色々とかこういったオンラインゲームをやっているからそういう意味では初心者とは言いづらいかな。上級者とも間違っても言えないけどね。僕が言ったのはこのゲームに関してはって事だよ。」

俺のどうでもいいような質問にもこうやって真意に答えてくれるその姿勢がとても気に入ったっていうか感動した。

実際色々と話聞いてみると、こういったゲーム（オンラインゲーム）って言ったよな？）の中ではマナーをきちんとして遊ぶ人や、ダイスみたいに親切に真意に答えてくれる人ばかりじゃないって感じだったからな。

むしろ、そういう感じの人は多くないって書いてあった。

だから初めて話した同じプレイヤーがダイスみたいな良い人で本当に良かったと思った訳だ。

「そうなのか。一応ある程度調べはしたんだが、こういったゲーム、

オンラインゲームって言ったよな？今まで少し触った事がある程度で初めてみたいなもんでな。実際こういう事を聞くのも可笑しいんだろ？そう言った事も解らんから、変な事や迷惑掛けちゃってたらすまねえな。」

俺がそう言って頭を下げると、慌てたように手を振りながら否定してくれた。

「そんな事無いさ！僕は少しだけ先にこのゲームに入っていたし、オンラインゲームをサヤ君より少し多くやっていたんだ。普通はそういう場合、教えるって言い方は違うけど話をしたり、聞いたりするのは当たり前……だと僕は思うんだ。他の人の考えは解らないけどね。」

そう言って苦笑を洩らすダイスが俺には本当に良くできた人間に見えた。

今までこんな感じの人に会った事が無かったから余計にそう感じたのかも知れねえけどな。

「ん、そうだね。僕と話してるよりこのゲームの事ならこの館？の中で話を聞くと色々解りやすいよ。しっかり聞いておいた方がいい話しも結構あったからね。アイテムとかも少しくれるから絶対入った方がいいんじゃないかな？と思うよ。」

俺が一人そんな事を考えていると、ダイスはそう言って笑った。色々と表情を変化させていたみたいでそれを笑われたっぽい。

「ああ、色々ありがとな。」

俺は其の恥ずかしさを隠すように片手を上げてダイスに挨拶をし

館？つてか小屋に入る事にした。

「気にしないで。それじゃあ頑張ろうねお互いに。始めた時期が殆ど同じみたいなものだから、これから何度か会うかもしれないよね？その時はよろしくね。」

ダイスが俺にそう言ってくれたので、俺も「その時はよろしく頼む。」と言って別れた。

ダイスが見えなくなつたのを確認してから俺は其の小屋に入った。まさか……あんな輩がいるとは思わなかったぜ其の時は。

さつきダイスが笑つたのはもしかしたらこいつの事を隠していたからかも知れない。

ちよつとした悪戯みたいな感じで。

そう思ってしまうほど目の前に輩に肝を冷やしたんだよ！

## アクセス3〜ゼロの村〜（後書き）

可笑しな点や間違い等ありましたら御指摘、御報告があると大変助かります。

自分自身でも何度も見直し確認しましたが、何かありましたらよろしく願います。

## アクセス4 初心者館？

「う、うわああああ！？」

初心者館に入っただけはまず悲鳴を上げた。

そりゃもう今まで生きていてこれ以上ないって程本気の悲鳴だったはずだぜ。

何せ入った瞬間目の前に……かの有名な金色の百獣の王が居たんだからな！

「わああああああ！？」

パニックになりながら悲鳴を上げ、慌てて入ってきた扉から外へ出ようとするが扉が開かぬえ！

「ちょ！まてやこらああああ！何で開かぬえんだよ！？」

ガチャガチャと何度も何度も扉を開けようとするがびくともしねえ。

「ぶわあっはっはっは！腰を抜かさず慌てながらも逃げようとするだけまだマシだな！まあ言わせてもらえば立ち向かってくる位の気概があれば我も満足したんだけどな。」

俺が必至こいて慌て、パニックになりながらも逃げようと躍起になっただけなのに、あろうことかその逃げようとしていた相手である張本人の百獣の王が、人語を解し思いっきり笑い飛ばしやがった。

(ぷっちーん)

その上何だ？腰を抜かさなただけマシ？立ち向かって来い？ふざけるな！誰がんな化け物ってか物理的に最強に位置する生き物に立ち向かえるってんだよ！？

百獣の王の態度に段々腹が立つてきた俺は、必至こいて逃げようとしていたのをやめ、ツカツカと近寄って行って目の前に立った。何か切れた音がしたって？

ああそりゃもう……間違いないぜ？

「お？もう冷静をとり……いてえ！」

百獣の王が笑いを取りやめ感心したように眩こうとした瞬間……思いつきり殴り飛ばした！……と言いたかったんだが拳で殴ると痛そうだったんで思いつきり蹴り飛ばした！

俗に言うヤクザキックってやつで。

完璧に堪忍袋の尾が切れたってやつだ。

まあ後から考えるとよくもまあこんな大それたことが出来たなあと俺自身感心するが、その時は余りの出来ごとにかなり鶏冠に来てたので、そんな事を気にする余裕というか考える頭が無かった。

「……………」

ゲシゲシと止むこと無くヤクザキックを連発していく。

百獣の王が「やめろ！」と大声で鳴いた其の時まで延々と蹴り続けてたね！

「全く！お前みたいなのは初めてだ！館の主である我に幾度となく蹴りをぶちかます等と……信じられん！」

「ふざけんな。手前えが立ち向かって来いとか何とか抜かしたんだろつが。言われた通りやってやったんだろつ？褒めるや！」

無茶苦茶だった。

無論俺がだよ？

未だ苛立ちが収まって無い俺は明らかに可笑しな事を言っていると、自分で解っていないながらも尚強固に其の態度を貫き通す。

「あ？人が必至こいて慌てて逃げようつてえのに、それを後ろから可笑しな評価下しながら偉そうに笑いやがつて……んな事やられりや軽く切れるのも仕方ねえだろつが！」

完璧に逆恨みですありがとうございます。

「あ、う、うむ……す、すまなかったな……つて我が謝る事なのか！？」

勢いに流されてつい謝ってくる百獣の王、何やら向こうも少し混乱しているようだ。

「当たり前だろつが！？手前えが謝らないで誰が謝るつてんだよ！すまないって気持ちがあんなら誠意の一つや二つ見せるや！」

おーう。

自分の事ながら何ともヤクザ染みた物言いだなあって感じたぞ今のは。

おっと勘違いしてもらったら困るぜ。

俺は間違つてもヤクザとかそつち系の人間ではないからな？

「そ、そうか、本当にすまなかった……誠意と言つと……どうすれ

ばいいものやら解らぬのだが……。」

意外と素直な百獣の王。

ちなみに俺はもうそろそろ鶏冠に来ていた怒りも収まって来ている。

ただこの百獣の王どうやら誠意ってもんを見せようとしてるらしい……（ニヤリ）断るのも礼儀知らずだろう？

親切に教えてやったさ！

……変な笑みが見えたって？

はっはっは。

馬鹿言っちゃいけないよ、んな訳無いだろう？（台詞棒読み）

「んなもん普通手前えで考えるもん何だよ！ たく、今まで他の奴等だと自分の持っている物とかを持って誠意と変える……ってのが多いらしいぜ……間違えるなよ！ 俺がそれを求めてるって訳じゃねえんだからな！ その辺りをしっかり考えてよ、誠意ってもん見せてくれや。」

「ん、んむ、そうなのか。本当にすまなかった。これで許してくれ。」

そう言っ手渡して来たのは一つのカード。

「ん？ 何だこのカード？」

思わず素に戻って聞いちゃまった後にやべえ！ と思っ百獣の王を見ると、さっきまでの怯えた態度というか、流された態度が消えて、どこか最初に会ったレイアスの説明をしている時の雰囲気と同じものを感じた。

「このカードは武器や防具、アイテム類を封じてあるカードだ。カードを所持して念じれば実物化し、其の武器や防具、アイテムを使う事が出来る。」

ふーん。

何々このアイテムは……ってかアクセサリーか。

アクセサリー名が【虹色のクリスタル】ねえ。

カードには名前と、絵が描かさってあったんで、心の中で其のアクセサリーの名前と絵を思い浮かべた。

(虹色のクリスタル……銀のチェーンを用いた虹色に光るクリスタルの首飾り。)

そうやって心の中で思い浮かべていくと手の上にあったカードが消え、質量のあるネックレスが現れた。

「そうだ、そのように行えば全てのカードを現実化させる事が出来る。無論逆も同じだ。」

俺はそう言われたんでまず其のネックレスを、カードに戻れと念じてみた。

次の瞬間最初にあったカードと全く同じ物が手の平に収まっていた。

「おおー！すげえ！って念じる時も現実化しろって念じるだけで……おう！なるわけだな！」

感動しながらカードに戻ったアクセサリーを現実化しろと念じた処、普通に質量のあるネックレスに変わった。

「飲み込みが速くて素晴らしい。ちなみに特殊なアイテムに限り特定エリア、指定場所でしか現実化出来ない物もあるから覚えていと良いだろう。」

満足そうに頷く百獣の王。

其処でハツと先程まで責められていたのを思い出したらしく、もう一度謝って来た。

「あ、ああ。こうやってきちんと誠意も見せてくれたんだ、もう怒ってねえよ。」

何だか少し申し訳ないなあって気分になったが、過ぎちまった事だしまあいいか！と考えて改めて説明を受ける事にした。

俺がそう言くと、百獣の王も気を取り直して最初から説明するぞ？と念を押して話し始めたのだった……ってか話しなげえよ！物凄く長い……聞き終わる頃には疲れきってんじゃねえか俺？それ位に長い説明が始まったんだよ。

## アクセス4 初心者館? (後書き)

可笑しな点や間違い等ありましたら御指摘、御報告があると大変助かります。

自分自身でも何度も見直し確認しましたが、何かありましたらよろしく願います。

## アクセス5 初心者館？状況整理

「よし！じゃあまずはこの世界についてから説明するぞ。」

目の前で百獣の王が仁王立ちした。

……はあ！？

「ちょ！おま！立てんのかよ！つてか立てんなら出迎える時何で立つてねえよ！？」

こいつ本気で普通に二本の足で立ち上がってやがるんだぜ？  
普通にふざけるなって話だろう？

「ん？……ああ！そういう言えばまだ話していなかったのだな。我が獣人族であるという事を、すまなかったな。ちなみに出迎えた時に立ってなかったのは疲れるからだ！」

……落ち着け俺。

今、此処できれて話しをへし折ったら困るのは俺だぞ。

クールだ。

クールになれ鞘！改めサヤ！

そう、クールにだ！

「ふう……なんか一気に疲れた……一先ずいいから続き説明しろや。」

おっと、無意識化で言葉使いが悪くなっちゃってるな。  
つて、普段から俺こんな話し方だったっけか。

「うむ、続けるとしよう。この世界エルドラドには人が住む三つの大きな大陸と一つの小さな大陸がある。ちなみに小競り合いみたいなものはあるが、本格的な戦争は今の処無い。かろうじて三大大陸それぞれが戦力差など殆ど無く、均衡を保っている為にだ。是が崩れればいつ戦争が起こっても可笑しくないがな。そして今我等がいるこの地が小さな大陸ドラドだ。この地は聖なる地と呼ばれると共に、攻めても損になる事はあっても得になる事が無い為、三大大陸から攻めてこられる事が無い。この地から旅立つ異世界の者達の多くはこの三大大陸のいずれかに渡り、その国に仕えたりする者が多いな。国に仕えればそれ相応のメリットがあるからな……まあ今は説明を省くがな。ちなみに、三大大陸の名前は北の大陸グランエリド、東の大陸レグランド、西の大陸ランドクラクだ。一応……南にこの三大大陸を全部合わせた大きさ位の大陸があるんだが……其処はモンスターノ巢窟となつている為誰一人として近寄る事が出来ない為名前も付いていない未知の大陸だ。この世界にある大陸と状況を簡単に説明するとこんなものだな。詳しい説明をすると其れこそ何日掛かるか解らなくなってしまうからな！知りたければ書物室で調べてみると良いだろう。この建物の二階にあるからな。」

何事も無かつたかのように説明を続けやがった百獣の王。

「すいません、正直説明長すぎます！」

「つてかなもん一々覚えてられっかつての。」

大陸の名前と今は何時戦争が起こっても可笑しくないつて事だけ覚えておけばいいだろう？

「了解、了解。続きを頼む。」

突っ込まれる前に次を促すことにした。

「今迄の経験上、今の状態で黙っていると解らない処が無いかどうか聞かれるからな！」

まあ聞かれたら聞かれたで大丈夫だつて応えるだけだが。

「ふむ、細々した処で解らない事があれば先程も言ったが書物室で調べるか、村人にでも聞けば良かるう。全ての人がという訳では無いが殆どの人が話を聞いてくれるだろう。それでは次の……説明に入る前にこれを渡しておかねばな。」

そう言つて手渡されたのは銀色の小さな銀の板。

「ん？これ何よ？」

ちらちらと差し込む日差しに驚してみると日差しを綺麗に反射する程、磨きこまれた様な綺麗な銀の板だ。

「それはな、お前の今の能力やレベルを確認するためのアイテムだ。我等はドッグタグと呼んでいる。それを握り締め自分の名前を念じてみるといい。」

俺は言われるがままに其のドッグタグを握り締め自分の名前を念じてみた。

(俺の名前はサヤ。唯のサヤだ。)

「ぬあつ！？……つと？ん？お、おおお！何か変わった！」

念じた後、少しして突然手の中のドッグタグが光り輝き慌てふためいていると少しずつ光が収まってきたんで、恐るおそる覗き込んでみた訳だ。

其処で目にした光景は！

さっきまで唯の真っ平らな銀の板だったドッグタグが、不思議な

文様というか文字？が刻まれた指輪に変わったんだよ！

「上手くいったようだな。それが識の指輪だ。それを指に嵌め今度からは自分の今の状態は？と念じれば頭の中に直接其の情報が流れるようになってる筈だ。」

（ふむ、今の俺の状態はどうなってんだ？）

言われた通りに念じてみると……。

・サヤの現在のステータス・

・LV：1・

・経験値：0・

・体力：125・

・精神力：40・

・力：13・

・知力：10・

・敏捷：14・

・行動力：17・

(へえ……頭の中に流れ込むって言うからどんなもんかと思ったが、頭の中に良く有るパラメーター画面が映るって感じだな。っと？ふむ。この画面考えた通りに動くのか。矢印が押せない……多分レベルが上がった時にサービスポイントだかボーナスポイントだかつてのが入るのはは？)

いやあすげえすげえ！

ってか面白い！

「上手く出来ている様だな。それではその指輪にさつき渡したカードを触れさせ収納しろと念じてみる。」

(ふむふむ、消えた。出て来い！……あれ？出てこねえなあ。出す時はまた別なのか。)

「消えたであろう？次に其のアイテムを出す時にはアイテムの名前を思い浮かべて出ると念じれば出る。ちなみにアイテムを今な持っているか解らなくなってしまった場合は今アイテム何がある？と念じれば今持っているアイテムの名前と数が頭の中にさつきと同じように流れていく。」

「お！出来た出来た。すげえ便利なのなこれ！」

俺は一人その不思議な現象にはしゃいでいたが、その間も説明は続ける。

「ちなみに其の指輪の中に入れられるアイテムは二十種類までだ。同じアイテムであれば最高五十個まで一種類として入れられる。ただ武器や防具、アクセサリ等の装備品や一部特殊なアイテムは、一つを一種類としてしか入れる事が出来ないから気をつけろよ。」

なるほどね。

便利なもんなんだなあ。

RPGのゲームみたいな感じって覚えておけばいいんだな。

覚えやすく良いぜ。

「そうだな。一つ便利な能力が其の指輪にあるのを教えておこう。装備品に関してだが、その指輪の中に入っている装備品であれば、念じただけで直接装備する事が可能になる。というとても便利な能力も付いている。ちなみにだが、例えば今お前が鎧を装備して新しい鎧に変更しようとした場合も念じただけで装備の変更が可能だ。無論変更したアイテムは指輪の中に入れられた状態になるだけだから無くなる心配も無いぞ。」

其の説明を聞いてから俺は先ず虹色のクリスタルを指輪に入れ、装備すると念じてみた。

「おおー！本当にいきなり首に現れやがった！すげえし便利だ！」

俺の首に若干の重さを感じるクリスタルが掛けられ俺はそれを弄りながら興奮したように叫んでいた。

いやだつてさ、仕方ないだろう？

誰だつてこんな不思議ですげえ魔法みたいなもの初めて見せられればはしゃぐつて！

間違い無い！

「取りあえず、我が教える世界についての簡単な知識と、ドッグタグの使い方についてはこれ以上教える事が無い。……というのもドッグタグについては我等もまだ完璧に解析が済んでいないので其れ以上他に何か能力があるのかどうか解らんだ。解り次第発表し

ていくがな。」

目の前の百獣の王は少しすまなそうにそう言って俺を見つめてきた。

いや、こんな危険な獣に見つめられても嬉しくねえよ。

「ふん解ったわ。取りあえずここで今受けられる説明は終わりで事か？」

「うむ、最後に饞別だ。この世界に来たばかりで武器も防具も何もないのであろう？これを持っていくと良い。」

そう言っ手渡されたのは銅の剣と革の鎧、それと緑色のガラス瓶に入った液体が五個と赤いガラス瓶に入った液体が十個。

「其の緑色のがポイズンポーションだ。毒を受けた場合それを飲めばしばらくしたら毒が抜けるようになる。ただし当たり前のことだが直ぐに抜ける訳では無いからな気をつけろよ。そして赤い液体がポーションだ。是は体力を回復させる物だ。ただ傷を治す物では無いから傷をほうって置くと段々体力が落ちて意味がなくなるから、きちんと傷の当てもするようにな。」

（意外とシビア何だな……てつきりこのポーション飲めば傷とかも治るもんだと思ってたし、毒も直ぐ治ると勘違いしてたな……流石オンラインゲームだ。）

なんて考えながら先ずその革の鎧を着込み、次に銅の剣を腰に差し込んだ。

うお、ずっしりくるなあ。

「意外と重たいんだな剣つて。何よりこの革の鎧微妙にくせえ……。」

其の上動きにくさは余り無いものの動いていたら、風通しとか全く無いせいかすげえ蒸れて熱くなりそうだ。

そしてこの剣。

両手で握れば振り回す事も出来るが、片手だと上手くは扱えない。結構な重量があるからな。

片手で使えば恐らく唯振り下ろすだけが精いっぱいだろうな。

何より握り部分は分厚い布が幾重にも巻かれていて、刃の部分も切れ味つつうもんは皆無に近いがその冷たさと無骨さが微妙に恐怖心を誘う。

あ、飽くまで微妙にだからな。

唯その分その重さと無骨さから頼もしさを感じるのも事実だけだな。

「当たり前だろう。銅を使った剣だぞ？軽い訳が無かるう。一先ず今日は隣の宿屋で休むといい、我が話を通しておくから今日だけはタダで泊めて貰えるだろう。ただ明日からはきちんと自分自身で稼がねば泊まる事も出来なければ、食事もできず、武器や防具、回復のアイテムさえ揃えられなくなるから頑張れよ。」

稼がないとやばい訳だな……ってのは解ったんだが。

「どうやって稼げばいいんだ？」

そう、其処に尽きるだろう！

普通に考えればモンスターを倒してそいつが金を落とすとかだろ  
うが。

実際問題これだけシビアな世界なんだ、モンスターが金を持って

いる訳が無いだろうな。

「そうだな、色々方法があるが一番手っ取り早いのはやはりモンスターを倒し、其のモンスターの毛皮やら足やら甲羅等収集家が集めるような物を売る事だな。後はアルバイトだ。宿屋のベッドメイクや食事等を作ったり、客を案内したり、道具屋の売り子をやったり等色々あるから自分に合うと思った事をやればいいだろう。こちらは比較的安全だがやはりその分身入りは少ないな。今お前が出来るのはこれ位だろう。」

ふむ、やはりそうだよな。

モンスターを倒す事には変わり無いが収集品を集めて売りに来ないといけない訳か。

めんどくさいが、色々わくわくするな。

「なるほどね。解った。色々サンキューな、もし何か解らない事とかあったらまた聞きに来るわ。」

俺がそう言って話を終えた百獣の王に背を向け出口に向かい歩き出すと、背中から「何時でも来るがいい。」といった声が返ってきた。

その返事に応える代わりに片手を上げて俺は初心者館から出た。

そして外は……。

「どんだけ長いんだよ説明……。」

すでに日が暮れて暗い帳が下りてきていた。

いや本気で疲れたぜ……。

## アクセス5 初心者館？状況整理（後書き）

可笑しな点や間違い等ありましたら御指摘、御報告があると大変助かります。

自分自身でも何度も見直し確認しましたが、何かありましたらよろしく願います。

## アクセス6 宿屋と旨い飯

「にしても……本当に全部木材の建物なんだなあ。」

俺は初心者館？を出て其の壁を手で触わってみた。

ざらざらとした木の感触、良く現実世界にあるような綺麗に加工された木材とかではなく、ある程度体裁を整えただけの木材を使っているみたいだな。

本当にこーゆうの良いな！

俺は改めて街を見まわしてみた。

本当に小さな村だぜ。

初心者館？の隣には宿。

其の少し離れた隣に恐らく武器、防具の店だろうなあ。あれは、その隣に並ぶのがアクセサリー屋か。

初心者館？の反対方向にあるのが一つはおそらく道具屋でもう

一つは……杖の模様が描かれてるから魔法屋？かね？

良く解らん。

まあ明日入って聞いてみるとするか。

んでもって街の中央に小さな丸い芝生がある訳だ。

さっきノラから聞いた話だと道具屋の裏手に小さな畑もあるらしいな。

柵とかで街を覆ってないから、どこからどこまでが村かは解らないものの、建物のある範囲だけを見れば、一平方キロメートル位しかねえだろうなこりゃ……。

「おっ！良い匂いだ！」

俺が宿屋前まで来ると、とても美味しそうな匂いが外まで漂ってきた訳で、思わず宿屋に直ぐ入っちゃった。

「カランカラン」

「いらっしゃいー!」

入った瞬間元気のいい声が聞こえて少しびっくりした。

俺はキョロキョロと周りを見渡しながら、邪魔にならないようにカウンターまで行こうとしたんだが……。

「ドン!」

「いてえな!」

間違つてぶつかっちゃった。

いやだって、この宿屋酒場も兼ねてるみたいで、入口間際からぎつしり客がいるんだよ!

テーブルについて座っているものの、歩くスペースってのがどうしても余り無い訳で、注意しながら歩いててもこう、ぶつかっちゃまった訳だ。

「すまねえ、気をつけてたんだが……。」

「気をつけてたじゃすまねえんだよ!どうしてくれるんだ!せつかく頼んだビールが台無しじゃねえか!」

俺はそう言われたんで手元を覗いて見たが……。

「少しこぼれたただけだろう?あ、いや、すまなかったとは思っけど、其れ位であんまり怒るなよ。」

そう、手元を覗くと半分以上減ったビールジョッキで、零れたっ  
て言っても一口分も無い位のほんの少しだけテーブルに零れただけ  
なんだ。

んなもんでこんなに怒られてもなあ……と思う訳だがどうよ？  
いや確かにぶつかつちまったのは俺が悪いから素直に謝るけど…  
…それにしても怒りすぎじゃねえか？

「あ？ふざけんなよ餓鬼が！」

「うお！危ねえ！突然何だよ！？」

いきなりぶつかつたおっさんが殴り掛かってきやがったんで思わ  
ず避けた。

態々好き好んで痛い思いする趣味は無いんでね。

「ガラガラガシャン！？」

余りにも勢いよすぎだろうおっさん。

勢い余って向こうの席に突っ込んで扱けちまってたら良い笑いダ  
ネにしかならねえよ。

「おーい、おっさん大丈夫か？いきなり殴りかかってくるおっさん  
がいけねえんだぜ。俺は唯躲したただけだからな。」

俺はテーブルをひっくり返しながら転んでいるおっさんの背中に  
その声をかけてまたカウンターに向かつて歩き始めた。

何やら後ろでそのおっさんをぼこってる数人の男女がいるけど俺  
には関係ねえ。

「あっはっは！あんた意外と動けるんだねえ！殴られそうになった

瞬間あちゃ〜！って思ったけど躲わすなんてね！結構結構、男は強くなきゃいけないよ！」

カウンターについて話しかけようとしたんだが、またもや相手から話しかけられた。

（何だかなあ、今日は出鼻を挫かれる日なのか？）

まあ大した問題でもないので、愛想笑いを浮かべながら頷いた。

「ふむ？なるほどあんたがレオが言っていた異世界から来たって言う人間だね！話は聞いているよ。ほら其処に御掛け！直ぐに料理を持ってきてやるからさ！っと、そうそう！もちろん部屋も用意してあるから、今から用意する食事食べたら軽く汗でも流して休むといーさ！」

何だか一方的な嵐が過ぎ去ったみたいな感覚だ。

何故って……そりゃ。

「……俺何も言ってるねえよ……はあ。」

何だか本当に疲れた。

俺は言われた通り席について周りを見渡す。

カウンターには俺と同じように一人で来ているであろうプレイヤーなのかね？が五人。

後ろの方ではテーブルが八つあり、一つのテーブルに三人座れるようになっているみたいだが、其処がびっちり……どうにもこうにも息苦しそうな感じだなあ。

「あいよ、お待たせ！あたしミルカ特製シチューとハムだよ、もう

この味が忘れられないくらい美味しい料理さ！しつかり食べな！」

そう言っただけで目の前に結構大きな皿にクリームシチューっぽいやつと何だか解らないもののハム……にしてもこのハム分厚すぎるだろう！

軽く一枚一センチ以上あるハムが五切れ。

其れにおそらく是……ビールだよなあ……俺あんまり酒って得意じゃねえんだが……全部奢り何だし我儘言っただけねえか。

「……う、うめえ！？本気うめえ！」

シチューを一口食べてみたんだが、半端ねえ旨さだった。今迄食べた料理の中でも一位、二位を争うほどの旨さだ。

ハムも予想以上に柔らかく、少しピリツとした辛みとしよっぱさが堪らない！

少ししよっぱかったんでビールをグイツ！と飲み込んだんだが、今迄苦手だったビールがとても旨く感じられた訳だ。

「良い食べっぷりだね！そんな感動して食べてもらえりゃこっちとしても凄くうれいってモんだよ！ほら是サービスだ！」

俺が旨い旨い言いながらシチューを食べつくした時、ミルカが嬉しそうに俺のところに来て、ホットドックみたいなパンとシチューをまたくれた。

ホットドック見たいだが、中に入ってる具材はさっきのハムに、これはチーズだよな？

其の上に赤いケチャップみたいなソースがかかっている。

「これは……！！！！おおー！此れもうめえ！ってか辛え！けど旨！」

上の赤いケチャップみたいなのは、見た目だけケチャップで味はかなり辛かった。

けど其の辛さが一段とそのハムとチーズの旨さを引き立ててる感じだ！

その合間に飲むシチューがやっぱり旨い。

今日一日、かなり疲れたがこれだけでもう全部どうでも良く感じてきたぜ！

「ごちそうさん！ミルカって言ったっけ？こんな旨い飯食わせてくれてサンキューな！」

全部食べ終わり、食器を下げに来たミルカにそう言ったら大きな声で笑われると「少し待ってな！」と言ってバタバタと裏の厨房と思われる処に入ってしまった。

直ぐにまたバタバタと戻ってきて袋を渡されたんだが、其の中身が。

「ん？これは……おおっ！さっきの旨いパンじゃねえか！」

「そうさね！あんたが旨い旨い言ってくれたパンだよ！サービスで其れもやるよ！夜食にでも食べな！」

豪快に笑いながらそう言って俺の頭を撫でたミルカは目を細めて呟いた。

「あんたみたいに素直に旨い旨い言ってくれたのは沢山いたけどね、あたしにお礼を言ったのはあんたを含めて数人しかいなかったんだよ……少しばかり気落ちしてたからあんたみたいに旨かった、サンキューみたいに礼を言われるとあたしとしてもやる気が出てくるって訳さ。レオも偶にはいい子を紹介する事もあるんだね。」

嬉しそうに笑うミル力を見ながら俺はレオ？と考えを巡らす。

……ああ！

あの百獣の王か！

あいつレオって言うのか……って名前も聞かねえで話してたのか俺。

……ま、まあいいか、今解ったんだし。

「さて！あんたも軽く汗でも流してきな！部屋の方の湯を張っておいたから今直ぐいきな！部屋は其処の階段を上った先の三つ目の扉だよ！」

さっきまでの少し寂しそうで、嬉しそうな表情が嘘だったかみたいに、一気に表情をさっきまでの豪快な笑みを浮かべる表情に変え、俺を「さあさあ！」と急かし上え追いやりやがった。

「……耳赤かったなあ、恥ずかしかつたのかね。ってかあれNPCだろう？リアルすぎるぜ本当にさ。」

俺はそうばやきながら自分の部屋と言われた部屋に入った。

中にはベッドが一つと小さなテーブルが一つ、そして普通の風呂場の四分の一位の浴槽にお湯が張られていた。

「ふむ、流石にシャワーとか湯浴みとかは出来んのか。タオルがあるからこれで汗を拭いて流せって事だろうな。」

今迄そんな事をやった事は無かったが、まあ解らない奴なんていないだろうな。

全身を御湯を含んだタオルで拭き終わりベッドに腰かけると、予想以上に疲れてたんだだろうな、物凄く一気に眠たくなってきた。

「…………ふわあああ…………、ん、寝るか。」

俺はミルカからもらったパンをテーブルの上に置き、ベッドにもぐりこんだ。

…………っは！一瞬で今意識飛んだぜ。

…………ってなんで起きたのよそれで俺。

…………いいから素直に寝るかね。

そして、数瞬の後、意識は落ちていった。

アクセス6 宿屋と旨い飯 (後書き)

可笑しな点や間違い等ありましたら御指摘、御報告があると大変助かります。

自分自身でも何度も見直し確認しましたが、何かありましたらよろしく願います。

アクセスフゝ当たり前の事、魔法

「ミルカ、世話になった！ありがとな。」

俺はそう言っただけで宿屋を後にした。

と言っただけで多分今日もまた世話になるんだろうけどな。

「さて、昨日気になった彼処行ってみるかね。」

一人言を呟く癖なんか無かった筈なんだがなあ。

何か無意識に呟いてたぜ。

変な癖ついちまつた、なるべく早く治さねえとにしてみても……。

「こんなに人居たんだなって、当たり前か。」

辺り一面人が見えない処がねえ。

これが普通なのか？

「……俺おのぼりさんじゃねえか。」

周りをキョロキョロ見ているのをクスクスと他の奴に笑われて、

恥ずかしかった！

とりあえず、此処から離れてえ！

周りを気にしながら小走りで昨日から気になっていた、小さな店らしき小屋に逃げる様に駆け込んだ。

「カランカラン」

「ようこそ魔術教練場へ。」

出迎えてくれたの赤い髪をアップにした如何にも魔法使い！ってな感じの赤と黒のゆったりとしたローブを身に纏った女だ。

そしてこの場所魔術教練場だっけか？……まあ此処は俺の予想も当たらずとも遠からずって処かね？

きつとその筈だ！

「あー俺初めてでよく解らないんだけどさ、此処何をする場所なんだ？」

「あら、そうなんですか。此処はですね魔術を教える場所ですよ。」

教える？

「教えるって……どうやってだ？」

てつきりレベルが上がれば勝手に魔法とか覚えると思ったんだがこの話を聞いているとなんかめんどくさい感じの事をしないと覚えれないっばいな。

「そうですね、最初は勿論教える魔術がどんなものかを知る為に教本を元に座学ですね。その後実際に実際その魔術を行使する実技です。一人一人特性が違いますので、得て不得てがあります。普通はその特性に沿う魔術を教えますが、望むならばそれ以外の魔術を教える事が出来ます。唯特性以外の魔術は余り良い効果を発揮しませんのでお勧めはしませんよ。」

うっわあゝめんどくせえ。

ん？でも……。

「特性って何処で解るんだ？」

「此処で調べる事が出来ますよ。調べてみますか？」

ふむ。

そりゃやってみるしかねえだろ！

いや、だってさ覚えるのはめんどくさそうだけどそれ以上に興味があるんだよ！

魔法……魔術か？

まあどっちでも変わらねえだろ！

興味わかねえ訳がないだろうが。

「頼むわ、どうすればいいんだ？」

俺が頷きながら訪ねると、透き通った綺麗なクリスタルを握らされた……何かあったけえ。

不思議だな。

「其れを両手で握りしめ願って下さい。自分自身の特性を知りたいと。」

言われるが儘深呼吸をして、願ってみた。

（俺の特性が知りてえ！）

少しの間クリスタルを握りしめると、何か点滅し始めた。

「お？何だ此れ？」

「特性が解ったんですよ。まあ……珍しい！光と闇の特性だなんて！」

驚いた様に呟いた後、俺が不思議そうにしてるのに気付いて、やっと説明してくれた。

……先に説明してくれてもいいよなあ。

「ああ、すいません。何の説明もしていないのに解る訳がありませんでした。特性には三種類あるんですよ。それぞれが火と水、土と風、光と闇です。唯三種類あるとは言っても普通は火と水か土と風のどつちかなんですけどね。ですので光と闇と言うのはとても珍しいんです。そうですね……例えば、百人居たとしても一人いるか居ないか位の珍しさです。因みに火と水は攻撃と回復。土と風が支援補助。そして光と闇は攻撃から回復、支援補助まで出来る上、特殊な死の魔術も使えます。問題点があるとすれば初級魔術は比較的簡単に覚えられますが、中級から上級を覚えるのが他の二つより遥かに難しく、最上級と死の魔術は未だ覚えられた方がいない程困難です。」

……尚更めんどくせえ！

俺普通の方が良かったよ！

「特性つて変える事つて出来ねえの？」

出来れば直ぐにでも変える！

「無理です。特性は産まれた時から決まっているもので変更は出来ません。」

あーやっぱりそうだよなあ。

「はあ。」

「……どう致しますか？初級魔術は無料で教える事が出来ますが、光と闇ですと全部で四つありますのでどんなに早くても一週間は掛かります。」

「一週間か……なげえな。」

「でも魔術使ってみたいし、仕方ないか。」

「それじゃあ教えてくれ。」

「はい、解りました。今日中に教材を用意しますので、明日から都合のいい時間にいらして下さい。」

「了解。明日また来るわ。」

俺はそう言っただけで魔術教練場を後にした……明日からめんどくさい事になると解ったから肩を落としてな。

「カランカラン」

「はあ……まあこれ以上気にしても仕方ねえか。一先ずは金を稼がねえとな、最低でも一週間は宿屋に泊まれる位はって……宿代って幾ら位何だ？」

「ヤバイ困った。」

金を稼ぐ為には村の外のモンスターを倒せばいいというのは解るが、金の価値が解らない上、物価がそれ以上に解んねえ。

「はあ……仕方ない、あの百獣の王……レオだっけか。あいつに聞

きに行くか。」

めんどくさがりながら歩き始めた訳だが初心者の館？……ああ紛らわしい！もう今度から初心者の小屋って呼ぶ！

……んで、初心者の小屋の前まで来たんだが、扉を開ける直前で声を掛けられたんだよ。

背中から、聞き覚えのある声がな。

まあ、声を掛けて貰って助かった。

そりゃ物凄く。

色々教えてくれた上、色々手伝ってくれたんだからな。

何より仲間と呼べる間柄になったのが一番良かったぜ！

アクセスフゝ当たり前の事、魔法ゝ（後書き）

可笑しな点や間違い等ありましたら御指摘、御報告があると大変助かります。

自分自身でも何度も見直し確認しましたが、何かありましたらよろしく願います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4141f/>

---

エルドラド

2010年10月11日11時20分発行